

JAAF
MIE

三重陸協会報

第12号

一般財団法人
三重陸上競技協会

事務局・〒516-0023 伊勢市宇治館町510 (三重交通Gスポーツの杜伊勢内)

TEL 0596-22-8890・FAX 0596-63-5337

URL: <http://mierk.jp/>MAIL: info@mierk.jp

ごあいさつ

三重陸上競技協会 会長 田村憲久



まだまだ新型コロナウイルスが全国的に猛威を振るっています。私たちの身近なところでも不自由を感じる生活が続いています。

本県においても美し国三重市町対抗駅伝が2年連続の中止となり、都道府県対抗駅伝も女子は開催できましたが男子は中止となっていました。また、何と言っても三重陸上競技協会がこの数年間最も力を注いでした、みえとこわか国体、とこわか大会の中止にはすべてを奪われてしまったような失望感すら覚えました。国体に向けてトレーニングを積んできた選手の皆様さん、準備を進めてきた大会役員、関係者の皆さんの心中をお察しします。

前向きな話をしますと、1年延期になっていた東京2020オリンピックが無事開催され本県からも陸上競技に3選手が出場しました。残念ながら決勝進

出や入賞とまでは行きませんが、素晴らしい活躍を見せてくれました。中村匠吾選手は三重県選手第一号で出場を決めてくれました。前回リオ大会の石川末廣選手に続き、マラソンで出場したことで、三重県長距離界の強さを示してくれました。衛藤昂選手は前回から2大会連続の出場で日本の走高跳を牽引してくれました。今シーズン限りで引退されますが、今後も日本の跳躍界を盛り上げてもらえることを期待します。川端魁人選手は6月の日本選手権では400mで自己新記録かつ三重県新記録で優勝しました。その好調を保ったまま、オリンピックでは4×400mRに2走で出場し、日本タイ記録を出しました。中学校の教員もやりながら競技を続ける姿は、中学生に夢を与えてくれるでしょう。

先の見通せない世の中ではありますが、その中でも競技に向き合う選手や学生たちに力を与えられるような協会でありたいと思います。今後益々の三重県の陸上競技の発展を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

新しい時代へ

三重陸上競技協会 専務理事 松澤 二一



昨年、「とこわか国体」は中止になり、国体に向けた取り組みも徒労に終わってしまいました。特に、選手には大変申し訳なく思います。国体を競技生活の最終段階と絞ってきた人たちについては「がっくり」きた事と思います。他の競技団体においても、選手達の切実な思いを聞かれました。それ以上に辛かったのは、強化に当たってきた人たちの今までの思いがあり、目の前が真っ暗になった事と思います。これまでの取り組みが、これからの三重陸上競技協会の発展に繋がることを期待したいと思います。

さて2022年も始まり、シーズンも目前に迫りました。三重陸上競技協会としては、「栃木国体」を目標に進んでいきます。今国体は前年の種目とは変わり、選手自体も大きく変わります。今持っている競技力を発揮し、三重陸上競技協会の今までの取り組みの成果を示して欲しいものです。

また、協会としても取り組み方を今まで以上に強化すべく、普及と強化のより充実を図る取り組みをいたします。今までにない大会開催や競技運営などにも先進の思いを馳せるべく、実施したいと思います。是非ご賛同を頂き、選手の普及育成や強化に協力の程お願いいたします。

また、昨年は全国的な大会を開催しておりません。審判技術を示す機会を生かせるよう、7月末には、全国実業団連合強化部による、選抜種目の開催を三重県営陸上競技場で行う方向で準備しております。また、日本選手権・U16 U18の大会をここ数年間のうちに三重に持つてこられるように努力しております。乞うご期待。

これまで、色々述べてきましたが、三重の競技力は、中学・高校生が中心です。残念ながら、

本年も、中学選手が県外の学校へ進学するという事を聞かされましたが、これも、県下の学校の指導者育成が出来ていないためと思っております。一部の学校だけに選手が集まっているためもあるのですが、どの学校でも気持ちがあれば選手の育成が出来ます。ただ、人に聞くことのできない指導者が増えているため、競技力を向上することが出来ないのではないかと考えております。当協会では、研修の機会を増やす取り組みをしておりますが、意見が出てきません。所属の選手に非常に失礼だと思いますし、勉強以上に向上心のある選手の気持ちを削がないで欲しいと思います。選手は、指導者を選べないのです。一人でも多く、選手目線の指導者が増える事を期待します。

最後に、是非審判の方にお願ひしたいのは、配布した審判服・コートは絶対に着用してください。いつも言う事ですが、三重陸上競技協会はボランティアで審判服を配布しておりません。常に配布された新しい「制服」である審判服を着用してください。2022年も宜しく願ひします。

各地区陸協報告

桑員陸協

令和3年度も昨年に続き、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、感染症対策を徹底しながらの運営となりました。

桑員地区内には陸上部のない中学校が多くあり、小学生のチーム等の指導者が継続して中学生を指導してもらう他、近隣の陸上部のある学校の教員が他校の指導をする等、陸上部の無い学校の選手の居場所づくりを提供すると共に育成にも努めています。このような地道な活動の結果、高校に入り本格的に陸上競技を行う選手が多くなっていることは大変喜ばしく思います。特に今年度は、東員第一中学校の岡秀磨君は陸上部がない学校に在籍しながらも、今年度シーズン当初から好調な走りを見せ、7月の中学通信三重大会の100mに出場し10秒94で走り全日中に出場しました。このように地域独自で様々な手法を考え、取り組むことにより、一人でも多くの選手を発掘していきたいと考えております。

また、陸上部のある中学校でも課題があり、特に指導者の育成が急務となっております。昨年度も課題としていた、陸上指導者の指

導方法の習得を考え、本年度初めて、中学生の指導者の育成及び選手

の競技力向上を目指し、地区陸協強化部主体の強化練習会を実施しました。学校における日々の基礎練習が強化に繋がると考え、練習会では、中学校の指導者及び生徒約80名が集まり、平時から行える基礎的な練習方法を学び、参加した教員も普段学校で実施している練習と比較しながら、一生懸命メモを取るなど、積極的に指導方法を学ぶ姿が見受けられました。また、選手も他校の生徒と合同で練習するなかで、それぞれの意識を高められる良い機会となったと感じました。今後もこのような活動を継続して実施していき、地域全体の底上げをするため、更なる強化に努めていきたいと考えております。また、少子化が進むなか1人でも多く陸上競技者を増やす為に、さまざまな取り組みにより陸上競技人口の増加を目指していきます。

今年度も選手にとっても、協会にとっても新型コロナウイルスに振り回される年となってしまいました。選手のためにも、絶対に競技会に参加する機会を奪ってはいけません。いつ終息するかわからない状況ではありますが、withコロナとして、感染症と向き合

い、新しい手法を取り入れながら、徹底した感染症対策を実施し、競技会や合同練習会などの場を提供していきたいと考えています。

最後に、三重国体に向け地区陸協として積極的に取り組んでいたものの、中止となったことについて、非常に残念な結果となりました。しかしながら、今までの強化は無駄にはならないと考え、更なる今後の強化に繋がってきたいと思っています。

三泗陸協

今年度も、コロナ感染症に関連

して予定していた競技会の半数程度を開催することが出来ませんでした。ただ、小学生関連の行事がなかなか出来ない中、小学生の指導者の強い思いと協力もあって急きょ10月に地元小学生の大会を開催できたことは幸いでした。また、国民体育大会をはじめとして多くの競技会が中止に追い込まれた中でも、子どもたちが熱心に活動し、内数名は全国大会に出場し三重県代表として健闘してくれました。

小学校の部では、楠陸上Jrクラブの李 東翔君がコンバインドAで全国交流大会に出場しました。中学の部では、笹川中学の後藤杏実さんが100mHと四種競技の2種目で全国大会へ駒を進めました。後藤さんは10月に行われたU16全国大会においては100mH

で7位入賞と健闘しました。高校の部では、四日市商業高校の樋口七海さんが200mに出場、またチームとして4×100mRにも出場しました。ハード面においては、一昨年10月にメイン競技場がオープンし、すぐ隣に400mのサブトラックも併設し、競技会や多くの競技者の練習拠点として利用されています。また、公園内を1周するトリムコースはちょうど2.0kmになるように再整備されました。これからの行事の充実や競技力向上に貢献できるよう活用を計画していく所存です。

本年度三泗地区で開催予定だった競技会については、コロナ感染症の影響もありましたが、国民体育大会の関係で元々例年より少ない数となる予定でした。来年度は、従来通り計12の競技会を実施する計画です。県中学通信陸上大会の前哨戦として多くの学校から参加をいただいている四日市中学校カーニバルは6月に実施の予定です。また、競技場の改修工事の関係で2年間鈴鹿陸協にお世話いただいた選手権大会は、従来通りの内容に戻して10月に開催を計画しています。今後も四日市市のご理解・ご支援のもと陸上競技を愛する方々に愛着を持っていただける活動になるよう取り組んでいきます。

鈴鹿陸協

次世代への引き継ぎ

本年度もコロナの影響で通常の生活が出来なかったが、古い価値観のままではこのからの時代を乗り切ることは出来ないということに改めて気づかされた1年でもあった。

25年程前に初めて渡米してからここまでの間、国内の主大会と海外合宿を含め世界の主だった大会に参加し貴重な経験が出来たが、日本と海外の陸上競技に対する取り組みの違いに驚き、うらやましくもあり・・・それでも最後は日本と世界の差が開いていく様を現実として見せつけられた口惜しさの方が大きかった。最近日は本でどうすれば魅力のある陸上競技を運用できるのかという事ばかりを考えるようになった。今回も昨年に続き、鈴鹿陸協に限った内容から逸脱してしまうが広い意味で陸協広報誌としてお許しいただき、この場をお借りして、最後に今まで見てきたことを紹介しておきたいと思う。諸外国の育成方法を知ることと既存の概念にとらわれることなく自由な発想の元に、今後の日本の陸上界を世界的なレベルに発展させていってほしいと思います。

【東京2020大会】

大変な状況下の中でオリンピックを開催いただいた組織委員会とボランティアStaffの皆様には感謝の言葉しかありません。私たち専任コーチでさえ会場内に入ることが出来ませんでした、やはりオリンピックは素晴らしい大会でした。以下、参加した衛藤からの報告文の一部を抜粋して掲載します。

2021年、東京で行われるオリンピックは、テクノロジーの進化とコロナの影響を強く感じる大会でした。

感染予防対策のため3日間しか過ごすことができなかった選手村は、①自動運転車の走行、②リアルタイムでの混雑状況の表示、③電柱のない景観、④アプリでの入退場管理、⑤オンラインでの情報提供など、スマートシティを先取りした街に設計されており、便利で過ごしやすい環境でした。グローバル化も推進されており、看板の多言語表示により、海外選手から質問されることも少なかったように思います。スポーツの祭典をアピールする場であったようにも感じました。

一方、テクノロジーの進化やコロナの影響により、寂しく感じる部分もありました。選手団の解団式を自宅からオンラインで参加

し、団長の解団宣言が発せられた時は、「オリンピック閉幕したんだ」と1人寂しく感じたことを覚えています。便利の中に、寂しさを感じた瞬間でした。

人との関わりが少なく、寂しい大会のように見えますが、人の温かみを感じる瞬間はたくさんありました。

1つは、走高跳の試合前の出来事です。東京オリンピック開催までの期間は海外への渡航制限がかけられ、1年以上海外遠征が出来ない状態でした。そんな中でオリ

ンピックに出場する選手は、1年間の困難を乗り越えた同志であり、緊張感で溢れる試合前の招集場が、互いを称えあうグータッチの場になりました。

もう1つは、ボランティアの方々との出来事です。ボランティアの方々は、決められたルールの中で動きつつも選手にとってプラスになることは柔軟に対応され、自分がプラスになること（食堂でのぞきにいく、選手と写真を撮るなど）は一切せずに、いつも真摯に動かれていました。出場した走高跳の選手から「日本、最高だね」と言ってもらえたのは、テクノロジーだけでなくボランティアの方々のおもてなしがあったからだと強く思います。

昨今、「やらなくていいか、代替で何とかなる」そう考えることが増えつつあるように感じま

す。実際にオリンピックも開催しなくて良いんじゃないか、そんな空気も流れました。コロナ禍で1年間トレーニングを継続する中で、「挑戦する意味」を考えるこ

とが幾度となくありました。出場権を得て選手村にいたときも、開催されて良いのだろうかと感じるときもありました。しかし、招集

場でのグータッチを経験し、挑戦し続けてきて良かったと強く感じる

ことができました。

オリンピックの精神には、「参加する事に意義がある、挑戦することに意味がある」という記載があります。オリンピックが開催されたことで、コロナで失われつつあった「人と人とのつながり」、「挑戦することの意味」を改めて思い出させてくれたと私は感じています。

【プロとアマの戦い】

ここからは現実の問題点を提起しながら進めたいと思います。

世界で戦う陸上競技のアスリートはほとんどがプロ選手だ。日本の選手は長距離を除けばアマチュアのカテゴリーになる。つまりプロの専属コーチ、専属のトレーナーがいらないし、天候に左右されずに技術練習を行えるような専属の室内練習場もない。そして一番

肝心な医科学チームとの協力体制が構築されていない。ほとんどの人が気づいていないが、サッカーや野球で言うプロとアマが普段か

ら一緒に試合をしているのだ。この環境での日本選手団に結果だけ求められてもそう簡単に国際大会で勝負することは出来ない。仮に、企業に属さずプロ選手になっ

たとしても生活できるだけのスポンサー収入を得るには日本では難しいし、個人でコーチを雇うなど不可能だ。しかし、例えば衛藤ぐ

らいの2m30を複数回跳んでいるレベルなら欧米なら陸上だけで生活できる。アジアなら中国はもと

より韓国でも生活出来る。

だから諸外国は高校年代までは決して無理をさせずに、お金を稼げるようになるシニア年代になるまで系統的なプログラムの元に育成している。プロになればコーチも選手の収入の一部が給料として入ってくるし、プロの選手を複数人指導すればコーチ業だけで生活

できる。何より観客が金を払ってでも見たいというレベルなので、組織的な運営が成り立つ。プロ選

手として1年でも長く活躍させることで選手・コーチ・協会が潤うから、大人になってから長く活躍させるとい根本的な考え方が結果としてジュニア期からシニア期への理想的な系統的指導体制に自然とつながっている。

【コーチのグレード】

アメリカではコーチ間で情報共有がなされ、練習の組み方、ペー

てはいけない練習法など陸連登録されたコーチの中で最新の情報を学べるようになっていて。コーチが指導する選手レベルによって研修内容が異なり、日本で言う上級

コーチは当然海外へ出向いてチームも出来る。日本は自分たちの仲間内で隠したり、雑誌などで紹介

している練習法には根本的な裏付けは秘密になっている事が多いので中々良い情報が伝わらない。昔

ながらの怪我をさせてしまうような練習方法も残っていて、これは

大きな問題だと思う。

【身体バランス】

昨年まで強化部に所属していた関係で、バランスチェックを頼まれた選手は県内外問わずにすべて対応してきた。チェックして元に戻すまでに状態がひどい場合には

一人2時間程かかる。夜9時過ぎまでかかって年間何十人と対応

してきたから、疲労の蓄積がパフォーマンスに及ぼす影響として、どの筋肉からどうやって影響

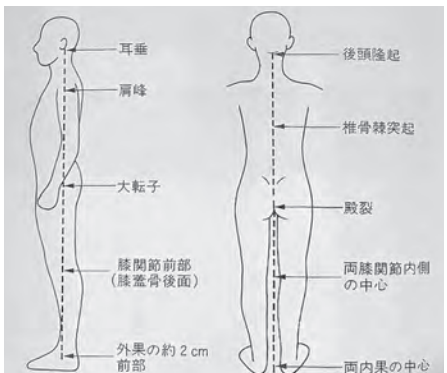
が出ているかが多少なりともわかってきた。

ここで昨年の文面に続き1シーズン制の根拠についてバランス面から述べたいと思う。例えば女子短距離選手を例にとってみると、中学時代から100m、200m、リレーとトップレベルで活躍



生終了まではなんとか走れるが、シニアになると怪我が頻繁に起こりやすくなる。また、写真のように足首が内側に曲がっている選手も多く見受けられる。走れないことはないが、放置しておくといろいろなところに痛みが生じ、医者に診てもらっても見当違いの筋肉を指摘されることが多く、中々治らない。これに外反母趾が加わると接地時のパワースが起き、大腿筋膜張筋あたりに痛みが生じるから、さらにやっかいな症状になる。

日本の場合、主力選手ほど10月末まで走りっぱなしで休む期間がほとんど無い。ところが外国なら7月以降シーズンオフに1ヶ月単位で女子でも普通に休ませる。休ませることでシーズン中にバランスの崩れた筋肉を一旦そぎ落とす。この筋肉を一旦落とすと言うことが非常に重要なポイントになる。そこから再度インナーマッスを中心に自体重を使った補強でじっくりと身体を3ヶ月以上かけ



【重心の位置】
図の引用…中村隆一著
基礎運動学 第6版
医歯薬出版 2003

（かみ合わせ）を必ず幼少期に済ませておくように指示されるそう

この図は矢状面と前額面からみた重心線で基本となる立位姿勢である。選手を壁に立たせて肩関節の位置、腰椎の位置を見れば比較的簡単にチェックができる。この重心線上に重心があることが理想であるのだが、大半の選手がかなり小なりずれている。日本代表クラスでも大きくずれていて、パフォーマンスが安定しない選手が見受けられる。重心位置がずれているままでパフォーマンスを発揮させれば本来なら分散される負荷が特定の筋肉や骨、関節にかかってしまい、限界を超えれば怪我につながる。調子が良すぎて肉離れが発生するわけではない！

この重心の位置を理想の位置にキープ出来るようにするのが体幹トレーニングであり、参考にしてほしいのがロンドンオリンピックからメダル数を増やし続けている日本水泳チームの体幹を「使える」状態にセットするトレーニング方法だ。中途半端な知識でウエイトトレーニングするよりも身体が細いままでも出力が出せるようになるので興味のある方は是非試していただきたい。

また、日本チームの中で最もトレーニングプログラムが確立しているのが競歩チームだ。2017年世界選手権の時に事前合宿でロ

ンドン市内の大学の施設を借りていた。その時、たまたま競歩チームと同じ時期に宿泊していて、初めて練習メニューを見学させてもらったのだが、内容の細かさにつくりした。W-upでそれぞれ、さらにオリジナルが加えられていた。1時間かけてじっくりと身体作りをし、動きのずれは逐一コーチが指導、メイン練習後はリラックスさせ、食事はすべて計算通り。試合当日はすべての局面が想定されていて、暑さ対策、ドリンク対策などは日本の医科学チームのバックアップのもとで完璧。このサポート体制は世界一といっても過言ではないぐらい素晴らしいものだった。安定してメダを取れているのはそれ相当の理由があるのだ。他の種目もメダル獲得経験のある外国人コーチで構築されたプログラムの元で医科学チームのサポートを共有すればもっとハイレベルな勝負が出来るだろう。

【最後に】

オリンピックを誘致して他の競技団体が外国人コーチを招聘し、果敢にメダル獲得に挑んだのに対し、日本の陸上界が一つにまとまることはなかった。しかし、日本の大半の指導者は教員とコーチという二足のわらじを履きながら様々なことを犠牲にして毎年選手

育成に取り組んでいる。外国から見たらプロ並のレベルのことを無報酬でやっているのだからすごいことだ。だからこそ、世界中のデータをベースにした本物の育成プログラムを共有し、外国人コーチ・選手をもっと日本に招いてグローバルな大会を運営しつつ、日本の豊かな感性を持つている指導者や幼少期の選手達に外国人選手の動きを見せてあげたい。シニア選手には国内でポイントを稼げるようにしてあげたい。そうする事で充

分世界と戦えるコーチ、選手育成ができると感じている。学校の入学時期の違い、欧米への移動距離、競技をする環境・設備・経費などの問題、また過剰になりすぎた県対抗、学校対抗の競い合いによる弊害などを次世代に積み残さないようにする事、そしてオリンピックに参加した各県代表の若い指導者達の感性が色あせないうちに新しい試みを実戦していける環境作りを身体が動く内に手伝っていき

たいと思う。この文面を読んで日本には日本のやり方があると反感を持った方もおられるでしょうし、ちょっと前までの私自身でもそう思っていました。しかし、実際に海外で戦ってみると・・・今回、オリンピックが45年ぶり（モスクワ除く）、戸

てこの実績なのは育成方法に問題があると捉えるかの違いだと思います。私は後者だと思っています。言われたことが間違っているもやらざるを得なかった時代は終わりにして、本物を追求していく環境に変えていきましょう！

亀山陸協

昨年度に続き新型コロナウイルス感染拡大により、亀山市内で開催される陸上競技大会はすべて中止になりました。昨年は亀山市在住、在校の中・高校生が感染症対策をしながら無観客で行われた陸上競技大会で活躍してくれました。

中学生では、亀山中学校の「森 祐磨さん」が東海中学陸上競技大会・1年男子1500mで2位に、また女子でも亀山中学校の「林 里音さん」がU16ジュニアオリ

ンピック大会・女子1000mに、高校生では、四日市商業高校の「森口和果さん」が東海高校新人陸上競技大会・女子走幅跳で3位に、亀山高校の「福本雅樹さん」がU18ジュニアオリンピック大会・男子走幅跳で6位に、亀山高校の「中山暖弥さん」が全国高等学校陸上競技対抗選手権大会・男子砲丸投に、予選会を勝ち進み見事全国大会に出場されました。また、陸上クラブ「JAC亀山」出身者が中学さらに高校でも活躍されています。本人の努力を称えるとともに、

日頃から健全育成も含め児童、生徒の指導に当たられている指導者や先生方に敬意と感謝している次第です。

小さな協会ですが市内小学生の陸上競技会、スポーツ少年団の駅伝大会、市内の駅伝大会等を運営しています。66年間続いた歴史ある亀山市駅伝大会も67回・68回と感染対策をしながら開催するため準備を進めていましたが、新型コロナウイルスの感染状況が現在は落ち着いているものの先行きは不透明であり参加者や大会関係者、地域の皆様の安全・安心を最優先に考え、今年度も開催を中止とさせていただきます。

今後、新型コロナウイルス感染が終息して観客を入れた陸上競技大会が開催できることを願っています。

津陸協

新型コロナウイルスの収束を願いつつ、東京オリンピック・パリリンピック、そして三重とこわか国体・とこわか大会開催に胸を膨らませて2021年が始まりました。東京オリンピック・パラリンピックではスポーツの持つ素晴らしい力を感じ、三重とこわか国体・とこわか大会開催に向けてさらに

急拡大のため直前で残念ながら中止となりました。本年を振り返ると、津地区および津地区出身の選手では日本室内陸上大阪大会で樋口七海さん（四日市商業高、U18・女子60m）、全国高校総体で小河彪さん（久居高、男子ハンマー投）が優勝し、日本選手権で植松直紀さん（スズキ、男子ハンマー投）、日本学生対校で三井康平さん（国士館大、男子円盤投）が入賞するなどの活躍をしてくれました。

5月に第1回津記録会・小学生大会津地区予選会を実施しました。新型コロナウイルスの不安がある中で、感染症対策を施しながらの実施となりました。また、11月には、感染状況が少し落ち着いた状態の中でしたが、やはり感染症対策を施しながら第2回津記録会を実施しました。しかし、諸事情により、津スプリントトライアスロンは残念ながら2年連続で実施できませんでした。通常の記録会とは趣が違うこの大会を楽しみにしていただいた選手や関係者の皆さんには大変申し訳ない気持ちでいっぱいです。

本年度も伊勢度会、松阪、鈴鹿、三河など多くの地区陸協様、南勢陸上クラブ様からの温かいご配慮やご支援をいただきながら2つの記録会を実施させていただきました。厚くお礼申し上げます。

津地区は約70名の審判員からなり、陸上競技の普及・強化を主な目的として記録会・大会・スポー

ッ教室等を開催しています。ただ、この2年間県外から指導者を招いての講習会は開催できていません。新型コロナが少し落ち着いて、県外から指導者を招いての講習会を実施したいと願っています。そして、小中高の連携をさらに深め、陸上競技の普及強化に努めていきたいと思っています。

さらに津地区では、陸上競技場の新設は、相変わらず大きな希望です。さらに粘り強く要望を続けていきます。

松阪地区陸協

松阪地区陸協は規模が小さく、審判員等も決して多いわけではありませんが、各学校・団体の方々のご協力により今年度も大会の運営などを円滑に行う事ができました。ありがとうございました。

今年度は三重県で開催の国体が中止されてしまいました。国体では松阪地区の選手や、松阪地区出身の選手も活躍が期待されていたので残念でした。そんななかでも多数の選手が少ないチャンスを活かして全国大会に出場し、立派な成果を残してくれました。指導者は工夫し、小学生・中学生・高校生の選手はトレーニングを継続して活躍してくれました。さらに、三雲中学校の男子は県中学駅伝大会で初優勝をし、見事に全国大会に出場を果たしてくれました。今年

度もコロナの影響で中止になってしまったものの開催にむけ準備を進めている県内初のフルマラソン「松阪マラソン」や、三重高校を発着する三重県高校駅伝も松阪市内で毎年開催されています。三雲中の全国駅伝初出場を機に、松阪地区の駅伝・マラソンのチームもさらなる活躍を期待しています。

今年度は全国中学生陸上競技大会において多気中学校の3年生田中大智選手が男子棒高跳第5位、おなじく村田宇哉選手も第7位でした。また全国高等学校陸上競技対校選手権大会において松阪商業高校の3年生 山川楓選手が女子やり投で第4位、おなじく濱千代琳香選手が女子400mハドルで第6位、山川選手と濱千代選手はU20日本選手権でもそれぞれ5位、7位と入賞し、活躍が目立ちました。

地元の小学生や中学生や高校生の活躍や、元氣な活動を地元の新聞などに大きく取り上げていただくことも多く、松阪地区の選手や指導者のやる気をさらに増大させているように感じています。今後

も松阪地区の陸上競技の普及にみなさま方とともに歩んで行きたいと思っています。

伊勢度会陸協

今年度も新型コロナウィルス感染症の拡大によりシーズン初戦の



第1回南勢記録会が中止になりましたが、その後の大会は予定通り開催することができました。また、中止になった第1回記録会も7月に「夏季記録会」と名称変更して開催できました。ご協力いただいた皆様には改めて御礼申し上げます。

また、8月あたりから新型コロナウイルスが再び猛威を振るいはじめ県内外の大会が中止となっていました。が、例年10月に実施している「第3回南勢記録会」を三重とこわか国体・とこわか大会の関係で11月3日の「文化の日」に計画していたことで、南勢地区だけでなく、他地区の選手にも競技する機会を提供できたことは嬉しく思います。また、県小学生選手権も中止になり、小学校での最後の大会出場

の機会をなくした小学6年生に競技場で走る機会を作りたいと考え小学生種目の追加を提案したところ、競技開始時間の繰り上げ、終了時間も遅くなるにもかかわら



ず賛同をいただき小学生種目を追加して実施できたことにも感謝いたします。2022年度も10月は国体や県中学、U16・U18日本選手権、東海高校新人があり、第3回記録会は11月3日「文化の日」に実施する予定です。気候も安定する時期で、今年の大会も最終ホームストレート追い風で実施できました。しばらく11月の競技会

は実施していませんでしたがスケジュール的なことやコンディションを考えるとこの時期も選択肢に入れるべきではないかと考えています。

今年度はインターハイで皇學館高校の川端優太くんが男子走高跳で第5位、伊勢学園高校の藤原理希くんが男子やり投で第7位に入賞。全日本中学では厚生中学校の井川稜斗くんが男子走高跳で第5位、城田中学校の倉井星碧くんが男子棒高跳で第6位、倉田中学校の橋本早右くんが男子4種競技で第8位、伊勢宮川中学校の浅井

琥桃さんが女子走高跳で第4位に入賞。またB決勝ながら厚生中学校の北尾心映さんが女子200mで第3位でした。小学校でも全国小学生交流大会でいすずUKの北尾琥太郎くんが5年男子100mで第8位、同じくいすずUKの小林衣葵さんが女子コンバインドB（走幅跳・ジャベボール）で第2位に入賞（ジャベボール投の53m71は三重県小学生新記録）しました。その他、U16・U18日本選手権でも多数の選手が入賞してくれました。

そして11月に行われた三重県高校駅伝では女子の宇治山田商業高校が20年ぶりの優勝を飾り都大路への切符を獲得しました。

その宇治山田商業の先輩で日本選手権をはじめ数々のタイトルを獲得した世古和さんが今季限りで現役生活に区切りをつけることになりました。「地元での国体を花道に」という願いは叶いませんでしたが新たに陸上クラブを創設しまだまだ陸上競技に携わってもらえるようです。お伊勢さんマラソンを盛り上げてくれている先輩の野口みずきさん同様、今後も三重県のためにご尽力をお願いいたします。

鳥羽志摩陸協

令和3年度は、鳥羽志摩地区の選手育成に携わっていただいた皆

様に感謝し、ここ数年取り組んでいる「陸上競技の普及」「選手の育成・強化」「若手指導者の育成」「地域のクラブチーム、小中学校との連携、さらには他競技との連携」を今まで以上に図っていくことを柱に、一人でも多くの選手がIH・全日中、国体で活躍できるように活動を進めてまいりました。ただ、残念なことに新型コロナウィルスの影響でいくつかの事業を中止せざるをえなかったのが現状です。

さて、令和3年度の鳥羽志摩陸協の特徴的な活動を3つ紹介させていただきます。

最初に28年度から実施している「出前陸上教室！」の開催です。

地区内の幼稚園、保育園を訪問し、児童や園児の皆さんに「走る・跳ぶ・投げる」ことの楽しさを感じてもらう事業です。令和3年度も多くの小学校、幼稚園、保育園からご依頼を頂いておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となりました。令和4年度は是非とも開催したいと思っています。

次に、小学校教員の方を対象にした審判講習会・実技講習会の開催です。地域との連携も計りながら、陸上競技の楽しさを伝える活動を実施しておりますが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となりました。

最後に合同練習会の開催です。特に毎年恒例となった国府の浜での砂浜やクロスカントリーを活用した冬季合同練習会につきましては、100名ほどの地区内外の選手が参加し実施する事ができました。

新型コロナウイルスの影響で事業の中止があるなかでうれしい状況もあります。それは、ここ数年取り組んでいる「若手指導者の育成」で、地区内の各クラブチームOBが地元にもどり選手の育成や陸協の活動に携わってくれていることです。これは、何物にも代え

がたい鳥羽志摩陸協の「宝」であると感じており、今後は若手指導者の活躍できる場面を増やすことができればと考えております。

鳥羽志摩地区において、人口の減少、少子化は深刻な問題です。他人事ではなく、児童・生徒数の減少に伴い小中学校の統廃合が完了し学校数も大きく減少しました。しかし、クラブチームに所属する小学生の人数は、数年前と変わらない傾向にあります。これは、指導者の方々の努力の賜物であり、陸上競技への最初の窓口である、普及に力を入れてきたことが効果を発揮しているものと思います。ただ、児童・生徒数はさらに減少の傾向にあり、今後、競技者が減少していてもおかしくない状況にあります。さらに、中学校では部活動の時間短縮等の課題もあり、地区陸協としても中学校やクラブチームとの連携を密にし、バックアップ体制を構築していくことが必要と感じております。

令和4年度は、引き続き「陸上競技の普及」「選手の育成・強化」「若手指導者の育成」「地域のクラブチーム、小中学校との連携、さらには他競技との連携」に加え、「現役指導者のスキルアップ」も合わせて活動を進めていきます。

伊賀陸協

昨年度に引き続き、新型コロナ

感染症に関わる競技会の中止、縮小を余儀なくされる状況が、今年度もかなり尾を引き多大なる影響がありました。

小学校全体での協力を得て行われている三重県陸上大会伊賀市予選会も、その影響で昨年は中止となりましたが、クラブチームを含め小学校区単位で毎年たくさんの方々が参加するため、今年度は名張陸上競技協会様にご協力いただき、メイハンフィールドにて、公認の競技会がなんとか開催することが出来ました。形を変えながらも、将来少しでも陸上に興味をもつていただける機会を設け、引き続き、参加していただけるように尽力していきたいと考えています。競技役員の方々の確保の問題はありますが、公認の競技場を使用することで選手の競技レベル向上にも繋がると考えています。地元から少し距離が遠くなりますが、各小学校、クラブチーム、保護者様には今まで以上に、ご理解、ご協力を得ながら、今後も行なっていきたいと考えています。

そして、東京オリンピックがようやく開催され、伊賀白鳳出身の中村匠吾選手の活躍もあり、一人でも多くの子ども達が、こうやって世界で活躍する姿を夢に見て、実現にむけて羽ばたいてほしいものです。

全国小学生陸上競技交流大会では、ゆめが丘R.Cの前川誉力君が

100mで8位入賞、同じく長谷川光玖さんも100mで健闘しました。

中学校、高等学校においても陸上競技部の数が少ないなか、全日中やジュニアオリンピック、高校総体、高校駅伝などの全国大会に出場し活躍できる選手もおり、より普及に力を注いでいける様、なんとか皆様のお力を賜りますようどうぞよろしくお願いします。地域過疎化が進み年々子どもたちの人口が減少していくなかで、引き続き、陸上競技の選手の確保や、指導者の確保、市内全体として小学校、中学校の活性化を図っていきたく考えています。

名張陸協

一昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の再拡大による緊急事態宣言や蔓延防止等の重点措置が実施され私たちは、大きな打撃を受けました。何とか東京オリンピックが開催されたことだけでも明るいニュースとなりました。オリンピック2か月経過した時点で再びデルタ株が猛威を振るつてどこか国体が中止になりました。昨年の全国中学校選手権大会も中止、ジュニアオリンピックも中止で出場権を得ていた名張市のホープ永安正弥選手は、全国の地で走ることはできませんでした。国体の代替試合は行われまし

たが、やはり47都道府県の国体選手をお招きをして競技をすることが、彼の願いでもあり、夢でもありました。

8月の感染者は、わずかな減少のもと茨城県で全国中学校選手権大会が開催されました。そこで、赤目中学校（名張ジュニア所属）の松山優太君が見事男子800mで全国3位（1分57秒65）に入賞することができました。

弟の唯人君も同じように出場をしB決勝で5位（1分58秒89）入賞しました。また、桔梗が丘中学校2年生竹下諒君も標準記録を破って全国大会に出場することができました。まだ、2年生ですが、今年の福島全国大会が楽しみな生徒です。（同じく名張ジュニア所属）

同じく8月に行われるはずであった東海小学校選手権大会（長野）が突然に中止になりました。この大会にも名張ジュニアである



北村環奈さんが三重県代表で出場が決まっていただけに残念でなりませんでした。彼女もまだ5年生なので今年の女子1000mの全国大会出場を目指して頑張っているかと話し合いました。（三重県大会女子1000m 3位 14秒66）

最後に感染症が少しだけ収まった時に開催された第105回日本陸上競技選手権大会（長居陸上競技場）が6月24日から27日の4日間で行われました。そこで、近大高専の伊藤陸君が走り幅跳び8m03優勝また三段跳びでは、17m00の跳躍で優勝を果たしました。走り幅跳びは三重県記録樹立また三段跳びはあと15センチで日本新記録に迫る記録を樹立し3年後のパリオリンピックの候補にふさわしい活躍でありました。コロナなんか飛んでいけという勢いもあり頼もしい選手の出現です。伊藤選手は、名張市で令和3年スポーツ大賞として表彰されました。同時に名張市スポーツ協会優良選手として、近大高専の本田基偉選手（U20全国陸上競技大会男子走り高跳び3位）伊藤渉選手（2021日本室内大会U20男子三段跳び3位）長田一晟選手（2021日本



室内大会U20男子60m JH 5位)
選手と第66回全日本中学生通信陸
上大会男子2000m 3位の永安正
弥選手も表彰されました。このよ
うな中での活躍を讃えたいと思っ
ています。

令和3年のコロナ禍の中名張市
陸上競技協会は、4回の競技会を
行うことができました。

第1回目の競技会は、伊賀市と
名張市が協働して三重県小学生選
手権大会の予選会を行いました。
小学生193人の参加でした。そ
の後中学生の記録会を行いました。
参加人数121人でした。近
隣である両市が審判員も補助員も
協力して競技会を行うことができ
ました。その後は、コロナ禍が進
み8月の市民大会はさすがに中止
を余儀なくされ代替試合として11
月に行うことになりました。名張
市の競技会は、年少さんから記録
が公認されることでたくさんの方
の参加があります。また小学生
は、全学年の60m走から100m



参加してくださった皆様のご協力
の元無事に終えることができました。
参加してくださった選手や引
率の皆様、また審判員の皆様のご
協力の元成功裡に大会を終えるこ
とができました。この紙面をお借
りしてお礼を申し上げます。

今年でメイハン競技場も日本陸
上競技連盟から公認審査を受けな
ければなりません。検定料が多額
のため難しい問題となっている昨
今ですが、市長を始め会長や関係
各位の皆さんが資金繰りに只今奮
闘中であります。この努力が実る
ことを願ってこれからも名張市競
技会が開催できることを願ってい
ます。

名張市陸上競技協会は、このグ
ランドで毎月2回小学生の陸上教
室を教育委員会の主催で行ってい
ます。

また、NPO団体の元キッズ陸
上教室も毎週火曜日水曜日に行っ
ています。さらに名張市陸上協会
の傘下で名張ジュニアの練習は、
火曜日水曜日金曜日と夕方5時か



ら7時まで練習をしています。シ
ニアの部では、夕方7時から9時
まで陸上愛好者の9歳から79歳の
方が参加して名張クラブとして練
習をしています。県外の榛原市の
高校生が参加したりまた、県内の
マスターズの方も参加し練習をし
てます。年齢を問わず和気あいあ
いとみんなでいい汗を流していま
す。このような練習が当たり前に
できるように今年も1日も早くコ
ロナが収束して将来のアスリート
の皆さんや医療費削減のためのマ
スターズの皆さんが笑顔で願晴る
(がんばる)姿が以前のように
戻ってくることを願っています。

尾鷲陸協

新型コロナウイルスの感染拡大
に伴い、本協会の活動は、令和3
年度も制限下の中での活動とな
り、課題の多い一年となりました。
また、地域の急激な過疎化は、少
子化を進行させ、陸上競技を行う
子どもたちは年々減少傾向にあり
ます。

そのような中、本協会では、地
域の子どもたちが陸上競技に触れ
合う機会を作り、走ることに楽し
さや記録にチャレンジすることの
醍醐味、自己記録を更新した時の
達成感を感じ取ってもらおうよう、
4年前から尾鷲市長距離選手権を
開催しています。この大会は、日
頃、陸上競技を行う者はもちろん、

野球・水泳・サッカー・バスケッ
トボール等、他の競技を行う者に
も積極的に参加していただき、地
域の陸上競技人口の増加と三重市
町対抗駅伝での順位アップをねら
いとして開催しているものです。

この大会がきっかけとなり、小学
校までは他の競技を行っていた者
が、中学校に入ってから陸上競
技を行う者が出始めるなど、少し
ずつではありますが、大会開催の
成果が出始めています。その一方
で、三重市町対抗駅伝では、尾鷲
市は毎年のように下位を低迷し、
尾鷲市民や出身者の期待に応えら
れていない現状があります。地域
に明るい話題を届け、地域が元氣
いっぱいになれるよう、本協会と
してどのような取組が必要か、そ
の方策を今後も模索しながら地道
な取組を継続していきたいと考え
ています。

本協会は小さな組織ですが、熱
意ある若手の協会の存在は強み
です。今後とも協会活動へのご支
援とご鞭撻のほど、よろしく願
いします。

北牟婁陸協

県内最小規模の北牟婁陸協です
が、昨年度中止になった「美し国
三重市町対抗駅伝」に向けて新体
制で頑張っているところです。
地区内の行事については、予定さ
れていたものが今年度も新型コロナ



ウイルス感染症の影響を受けて
ことごとく中止となり、行われた
ものは10月30日の中学生の新人戦
兼郡市大会の代替大会一つのみと
なっていました。

明るい話題としては、昨年度か
ら投擲で活躍が期待されていた世
古櫻紗(紀北中3年)が大きく成
長し、砲丸投では14m60、円盤投
では35m47と全国ランキングでそ
れぞれ4位と3位の上位にランク
される好記録をマークできたこと
です。三重県チームの女子キャプ
テンを任せられ活躍が期待された全
中の砲丸投では実力をうまく発揮
できず、後2cmで入賞を果たせな
くて悔しい思いもしましたが、東
海中学では砲丸投で圧勝するとと
もに、U16全国大会では円盤投で
5位に入賞(上位3人は高校1年
生の早生まれ選手なので中学生と
しては2位)するなど各種大会で
活躍することができました。来年
度の栃木国体では、少年B円盤投
が設定される可能性があり、日本
一を目指して精進を続けていると

ころです。

また、世古櫻紗とともに砲丸投で活躍が期待されていた同僚の小倉加稟（紀北中3年）も大きく成長し、目標の全中出場は果たせませんでした。が、東海中学では4位に入賞することができました。二人の活躍もあり、県中学陸上では紀北中学校が女子総合8位に入賞することもできました。

濱田茉裕（紀北中↓松阪商高2年）は今シーズン不調が続いていましたが、終盤に力を取り戻し、東海高校新人戦の砲丸投において自己ベストで4位に入賞することができたので、最後のシーズンでの活躍に期待したいと思います。

また、紀北中出身の九嶋大雅（伊賀白鳳高↓日体大3年）が箱根駅伝の8区を走り、この地区からは山口祥太（潮南中↓尾鷲高↓國學院大↓富士通）以来14年ぶりに同大会に選手を輩出できたことも明るい話題と言えます。

強化普及の面については、新型コロナウイルス感染症等の影響により、十分な活動をするのが難しい状況だったために、昨年度の11月から紀北RCというクラブチームを立ち上げて活動を強化し、対応しているところです。尾鷲高校の垣内元宏先生が指導する紀北ACでは、小学生の子どもたちに陸上競技に取り組みきっかけを与え、楽しく活動することも継続して行われています。

今後も、明るい話題を少しでも多く提供できるように頑張りたいと考えております。

熊野陸協



熊野陸上競技協会では、「熊野RC」のチームとして、小学生から中学生・高校生・一般の方まで

が一つのチームとして活動しています。現在、93人の選手が所属しています。練習は、主に小学生が毎週土曜日の夕方に熊野市営グラウンドや木本中学校グラウンドで、毎週水曜日の夜には木本中学校グラウンドで行っています。また、随時、木本中学校グラウンドで主に高校生以上の選手がナイター自主練習を行っています。

さらに、毎週木曜日を中心に、「熊野マラソン塾」と称して、美し国三重市町對抗駅伝長距離の選手を中心に長距離走の練習をしています。本年度は、小学生が活躍しました。竹蓋文人（木本小6年生）

が全国大会で4位（コンバインドB・2197点）を始め、10種目で県の20傑に入っています。

県大会では混合リレーで5位、県小大会では男子コンバインドA和田竜一（木本小6年生）が6位、5年男子100mで福田健吾（飛鳥小5年生）が4位に入り、2人は東海大会への出場権を得ました。男子のリレーを中心に秋の県小学選手権で記録更新を狙っていたのですが、中止になって残念でした。

今年は東紀州での大会がほぼ中止になり、県レベルの大会へもなかなか参加できませんでした。その中でよく健闘しました。小学校低学年から地道に練習を続けてきた選手が、いい記録を出しているのうれしく思います。

また、冬休み期間中に、木本中学校グラウンドにおいて、「みんなで走ろう 2022」を開催しました。地元出身の高見澤安珠選手（リオデジャネイロオリンピック出場・矢渕中出身）や清水剛士



選手（2021年 日本選手権10種競技銅メダル・木本中出身）、他にも現役で競技をしている大学生や高校生が、地元の小中学生に指導する企画でした。様々な交流が持てて、大変好評でした。

陸上部のある中学校・高校が少ないこと、指導者が少ないことが課題ですが、お互いに連絡を取り合いながら小学生・中学生・高校生・一般と継続的な指導ができるようにしています。

今後も、熊野市南牟婁郡地区で陸上競技の輪を広げられるように、熊野陸協として「熊野RC」を軸に活動していきたいと考えています。

各委員会等報告

競技委員会 JAAP

三重全中、三重国体と立て続きに中止。思いもよらない状況が我々の目の前に立ちほだかりました。今後も油断・予断はできません。

様々な準備をしてきたことが、徒勞となったような気持ちにもなりましたが、決してそのようなことはありません。そこに施設があります、そして人がいます、今後も成長や、より良い利用法があるはずです！求められます。大きな大会を機に資質の向上・発展ができることもあるでしょうが、三重陸協はいつでも全国大会規模の大会運営ができる、選手ファーストを基本とした大会運営が可能な団体であります。今後も、選手中心とした大会運営をよろしく願います。

オリンピックが終わり、いくつかのルールの修改正があります。大会運営上必要な知識となりますので、ご周知いただき、今後の大会運営に活かしてください。

◎確認事項として、記録が公認となる要件です。

1. 公認の大会であること。（陸連への申請大会）
2. 公認の競技場であること。
3. 公認審判員が審判業務していること。（補助員を除く）
4. 陸連競技規則により大会運営されていること。
5. 陸連登録の競技者であること。

以上、ご確認ください。

強化委員会 JAAP

昨年度、コロナウイルスの影響で鹿児島国体が中止になり、鹿児島の関係の方々の気持ちを察すると心が痛みました。その時は正直、気の毒な気持ちが大きく、まさか三重国体までが中止になるとは夢にも思っていませんでした。しかし、そのまさか現実となってしまいました。私自身も7年前から強化委員長をさせて頂き、その総決算が三重国体であり、非常に楽しみなチームに仕上がってきていましたので、言葉を失いました。大きなつぼみの開花を待ち望んでいたのに、咲く前に切られてしまったような気持ちで、その空白を埋めるのには正直なところ、時間がかかりました。得点力を一番

持った鹿兒島／三重国体の中止は無念で仕方ありません。

しかし、そのレガシーはハード、ソフト両面にしっかり残っています。勝てば官軍という言葉はありますが、本当に大切なことは勝つという目標を設定し、それに向かつて何を考え、どう行動したかのプロセスが一番大切であると思っています。強化部の選手、スタッフ一同は後悔の無いよう本当に精一杯頑張ってくれました。この場をお借りして素晴らしい仲間

に敬意を表したいと思います。7年間、強化を担当させて頂いて思うことは、組織は連携が一番大切だなどつくづく感じています。三重国体の代替試合である東海フレンドシップゲームは各種目の参加人数も少なく、例年は行われない試合なので、正直盛り上がりに欠けるのではないかと不安の方が大きかったです。しかし、当日は本当にたくさんの審判員の方にお越し頂き、各部署で連携して素晴らしい大会にして頂きました。改めて三重陸協の試合運営の素晴らしさを体感させて頂きました。本当にありがとうございます。

三重国体は中止になってしまいましたが、毎年、国体や都道府県駅伝は開催されます。これからも良い成果が上がるように精一杯頑張っていきたいと思っておりますので、

情報委員会

感染症の影響で少ない大会ではありましたが、多くの県記録が樹立されたことは嬉しい限りです。令和4年は全ての大会が開催出来ることを切に願います。

普及委員会

日頃は普及委員会の活動に、ご理解とご協力を賜り心より御礼申し上げます。

「強化委員会との連携重視」地区における普及活動の推進」「指導者の育成」の三本柱を重点目標に掲げ、今年度も取り組みを進めてきました。

特に今年度においては「指導者の育成」を最重要課題として、「一人でも多くの人が陸上競技を楽しむ」ことをコンセプトに「令和3年度三重県小学生指導者講習会」

を3月20日に開催予定です。コロナ禍の下、参加者を限定する形にはなりますが、今回は中学生がアシスタントコーチとして小学生を指導する実技講習も予定されていますので、たくさんの方に参加していただき、今後の各地区の普及活動に積極的に活用していただ

ればと考えています。

また、令和4年度には「三重とこわか国体レガシープロジェクト」として、陸上未経験者の親子を対象とした陸上教室の開催も計画しており、更なる裾野の広がりをめざした取り組みにもチャレンジしていきたいと思

います。来年度以降もたくさん子どもたちに夢を与え、陸上競技に対する意欲や興味・関心を高めるとともに、「選手の可能性の広がり」を大切にし、息の長い選手の育成のために努力してまいりますので、今後

技術委員会

①日本陸上競技連盟競技規則に従い、公式の競技会を開催し得る陸上競技場、および長距離走路ならびに競歩路の公認検定作業を行う。

②競技場の施設が、「公認陸上競技場および長距離走路ならびに競歩路規程」の各条項に基づき、競技の実施が可能かを確認し、もし不都合があれば管理者と折衝して整備の依頼をする。③用器具が規格に合致しているかを確認する。④競技会では、トラック、助走路、サークル、円弧、角度、着

地場所等が正しく整備されているかを確認し、得点表、成績表、記録表が用意されていることを点検する責任を負う。⑤競技進行中は、全般的に観察し、絶えず審判長や総務、関係部署と連携を図り協議を重ね、競技の円滑な進行を図る。

【競技場および長距離走路の公認終了期日】

公認終了期日

- (6) AGF鈴鹿陸上競技場 3種 2023年3月30日
- (7) 伊勢ハーフマラソン（ハーフ・10km・5km） 2025年5月31日
- (8) メイハンフィールド陸上競技場 4種L 2022年3月31日
- (9) 三重松阪マラソン 2025年4月30日

医事委員会

本年度の医事委員会の活動に、温かいご理解とご協力をいただき、深く御礼申し上げます。本年度も、新型コロナウイルス感染症のため、多くの方が期待されていた三重国体も中止となり、数、規模とも縮小された中で大会開催でしたが、小学生から一般

全ての年齢層の大会を対象に、年間10大会延べ18日間、現場での救護活動を行ってまいりました。このシーズンも、重大な事故、ケガ等は無く、無事予定を消化することが出来ました。

なお、例年行っているトレ

ご協賛をいただいた企業

- 更スポーツ
- スポーツショップ四日市
- ぎゅーとら
- NTN株式会社
- 株式会社デンソー
- 長谷川体育施設株式会社
- アシックスジャパン
- 株式会社 ニシ・スポーツ
- 株式会社 クレーマージャパン
- 岐阜協立大学
- 皇學館大学
- AGF 鈴鹿株式会社
- 日本体育施設
- ミズノ株式会社
- 三重県民共済
- ユタニペーカリー
- 株式会社 山中水産
- 住友電装株式会社

(敬称略)

日本陸上競技連盟栄章

令和元年度優秀指導者等の表彰が行われました。

- ◇高校優秀指導者章 大本 裕樹 (三重高校)
- ◇中学校優秀指導者章 三輪 亮介 (厚生中学)
- ◇高校優秀選手章 岩本 乙夏 (稲生高校)
- ◇中学校優秀選手章 坂山 成 (多気中学校)

中体連 JAAF

ナーステーションでのトレーナー活動に関しては、人と人との直接接触があるため、まだ依然として感染の危険性があることから活動を停止させていただきました。選手をはじめ、多くの関係者の方々に、ご迷惑とお手数をお掛けしましたこと、お詫びいたします。

また、今後もまだまだコロナ対策が必要となる生活の続くことが予想されます。時間の経過とともに、感染症も生活状況もどんどん変化していきますので、関係者の皆様も最新の知識と情報収集のため、常にアンテナを張っていただきたく思います。

来年度も難しい状況が続くような様子ではありますが、今以上のスタッフのスキルアップをはかり、選手の方々が安全で安心して臨める大会づくりに尽力して参りたいと思います。尚、来年度もトレーナー活動が可能ならば、トレーナーセッションは、競技場トレーニングルームに開設させていただきます。どうぞお気軽に同お待ちしております。

これからも、医事委員会の活動に、ご理解とご協力、そしてご参加いただけますようしくお願ひ申し上げます。

昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、多くの大会が中止になり、練習場所や練習時間の制限がかかる中、選手たちは悔しさや苦しみを乗り越えてきました。今年度も感染拡大により、大会も開催できるのか不安もある中、全ての大会ではありませんが、感染症対策をしつかり行いながら多くの大会を開催できたことを大変嬉しく思います。

大変な状況ではありましたが、多くの方々にご尽力いただき、茨城県で行われた「全日本中学校陸上競技選手権大会」も開催することができました。しかし、大会前日に発表された大会参加者全てのPCR検査の実施、それに伴い移動手段や出発時間の変更、タイムテーブルの急な変更など、選手にとっては予期せぬことがたくさん起こり、精神的にも肉体的にも負担がかかる大会となりました。その過酷な状況の中でも、選手たちは茨城の地で素晴らしい活躍を見せてくれました。男子800mの松山優太さん（赤目中）が第3位、男子1500mの田中智稀さん（白鳥中）が第4位、女子走高跳の浅井琥桃さん（伊勢宮川中）が第4位、男子走高跳の井川稜斗

さん（厚生中）が第5位、男子棒高跳の田中大智さん（多気中）が第5位、男子棒高跳の倉井星碧さん（城田中）が第6位、男子棒高跳の村田宇哉さん（多気中）が第7位、男子四種競技の橋本早右さん（倉田山中）が第8位と6種目8名の選手が入賞を果たしてくれました。

また、静岡県で行われた「東海中学校総合体育大会」においても8種目の優勝をはじめ、多くの入賞があり、インバクトのある結果を残してくれました。

「ジュニアオリンピックカップU16陸上競技大会」では、6種目の入賞を果たすことができ、次年度の活躍が期待できる選手も多く出てきてくれたことを喜ばしく思います。

12月に滋賀県で行われた「全国中学校駅伝大会」には、男子は三雲中学校が初出場、女子は四日市メリノール学院が初出場を果たし、全国という大舞台で堂々たる走りを見せてくれました。

また、3年生の多くの選手が中学校生活の最後の大会であり、歴史ある学校対抗戦となる大会でもある「三重県中学校陸上競技大会」でしたが、感染症拡大のため8月21日に県中体連からの中止連絡を受けました。それに伴い、（一財）三重陸上競技協会の全面的な

ご支援をいただき代替大会を開催していただきました。3年間努力を続けてきた選手にとってこの大会は、高校での陸上競技につながることも、かけがえのない大会となりました。選手はもちろん指導者としても有意義で価値のある大会となりました。

県強化練習会においては、感染症対策として参加人数を絞りましたが、活気のある充実した練習ができ、来シーズンの活躍を大いに期待できるものとなりました。コロナ禍ということで、秋季練習会以降は全体練習会を種目別にした

り、日程や会場を分けて実施するなどの工夫をしながら強化を進めています。参加者の中から、福島ので活躍する選手が多く出てくれることを大いに期待しています。

令和4年度は、今年度以上に全国での活躍、全体のレベルアップを目指します。また、指導者の育成にも力を入れて取り組んでいきます。より多くの中学生が陸上競技を好きになり、将来全国や世界で活躍できる選手を育成・発掘していきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

高体連 JAAF

令和3年、新型コロナウイルス

の収束は見えないまま、感染症対策を講じながらの大会運営になりました。残念ながら今年も我慢の一年となってしまったわけですが、コロナ禍で変動が多い中でも、希望を捨てずに大会運営に尽力していただいた役員の皆さん、審判の皆さん、感染症対策を行いながら懸命に力を出してくれた選手の皆様さん、その他支えていただいたすべての方に、心から感謝申し上げます。

さて、今年度は6月に三重での東海総体の開催することができました。大会運営では、三重県内、特に松阪・伊勢地区の学校の皆さんには競技会の運営に協力をして頂きました。改めてお礼申し上げます。東海総体では男子が38名、女子は20名の選手が福井総体への代表権を獲得してくれました。大会1日目では、予選を危なげなく通過した男子ハンマー投久居高校の小河君が決勝でも見事に優勝を勝ち取ってくれました。2日目は伊勢学園の藤原君が男子やり投で7位に入賞。3日目は松阪商業の濱千代さんが女子400mHで6位に入賞。4日目は女子やり投で松阪商業の山川さんが4位に入賞してくれました。そして最終日には、皇學館の川端君が5位に入賞と、毎日入賞する活躍をしてくれました。

高校駅伝においては伊賀白鳳高校が3年ぶりの優勝を果たしました。女子は20年ぶりに宇治山田商業が優勝、都大路への切符を手にし、健闘してくれました。実力を出し切れず涙を飲んだ者もおりましたが、それぞれの学校、それぞれの選手にドラマがあり、みなさんの頑張りには胸を熱くさせられました。みなさんの今後の活躍を楽しみにしています。

また、東海駅伝も本年度は三重県開催となりました。三重高校と松阪警察署からは多大なる支援をいただき、無事に大会を開催することができました。

冒頭でも申しあげましたが、今年も思うように陸上競技や大会が来ず、コロナに振り回された年となりました。制限が多く感染症への不安との闘いではありましたが、コロナ禍からみえてきた素晴らしいものもありました。それは、人々の温かさや懸命な姿勢を目の当たりにし、改めて陸上競技ができること、大会が運営されることへの「感謝」の気持ちを再確認することができたことです。まだまだ予断は許さない状況ですが、コロナ禍でもできることを最大限に行い、工夫し、一筋の希望を忘れず団結して努めたいと思います。来年も、選手の皆さんの活躍を期待したいと思います。